

鳥取県における病児・病後児保育の現状と課題

～保育学生が考えた病児・病後児保育の必要性～

○発表者名 鳥取短期大学幼児教育保育学科・学生 門脇 奈那実
共同研究者名 鳥取短期大学幼児教育保育学科・学生 河本 莉佳

1. 問題提起

保育実習などを通して、保育の現場では、子どもの体調の急な変化に対応する必要があることを実感した。保護者の立場で考えると、我が子が病気の時に家庭での対応が難しい場合の支援やサービスがあることは、子育てをしていく上での安心感につながると思われる。そこで、鳥取県内の病児・病後児保育の現状と課題を調査し、これから保育の現場で働くことになる私たち保育学生（保育者）にできることを考察したいと考えた。

2. 目的

本研究の目的は、病児・病後児保育施設への聞き取り調査から、病児・病後児保育の現状と課題を明らかにし、病児・病後児保育を必要としている人に知ってもらうための方策を検討することである。また、保育学生が病児・病後児保育に関わる意義についても考察したい。

3. 方法

(1) 方法

本研究の目的を達成するため、文献調査、関連資料の収集、病児・病後児保育を行っている施設等への聞き取り調査によって研究を進めた。2025年4月から着手し、鳥取県の病児・病後児保育の施設の情報収集、調査の赴く病児・病後児保育を選定し、聞き取り内容を検討した。9月から10月にかけて施設への聞き取り調査を行った。11月以降は、保育学生が病児・病後児保育に関わる意義について考察を深めた。

(2) 鳥取県内の病児・病後児保育の現状

鳥取県内で病児・病後児保育を提供している施設は、2025年4月現在、東部14施設、中部3施設、西部11施設で、計28施設ある。

これら病児・病後児保育施設のうち、西部の米子聖園ベビーホーム病後児保育室「こあら」（米子市）、中部の鳥取県立厚生病院病児保育「きらきら園」（倉吉市）の2施設に聞き取り調査を行った。主な聞き取り内容は、利用児数、利用の際の留意事項（利用できない病気など）、保育士と看護師の役割分担、病児・病後児保育を行う上で大切にしていること、必要な知識・能力、運営費、今後の課題と見通しなどである。

① 米子聖園ベビーホーム 病後児保育室「こあら」

「こあら」は、2024年6月に社会福祉法人みその児童福祉会によって、米子聖園ベビーホーム（乳児院）内に設立された。聞き取り調査は、2025年9月に米子聖園ベビーホーム「こあら」を訪問して実施した。対応してくださった看護師から下記のような話を聴くことができた。定員は2名で、生後6週から小学2年生まで預けることができる。利用条件は、同じ病気であれば1日に2名受け入れており、異なる場合は基本的には受け入れを断っている。

看護師と保育士の役割分担としては、看護師は病気などのアドバイスを言い、保育士は年齢に合わせたおもちゃ選びや子どもの状態によって遊び方の工夫を行っている。病後児保育を行うにあたっては、子どもにとっては初めての場所や人になるので、子どもの月齢や疾患の理解、好きなもの、遊びを理解することを大切にしている。保護者も病後の我が子を預けることへの不安が大きいため、預かるときに気持ちよく元気よく保護者を見送るようにしている。

課題は、病児・病後児の違いを理解してもらう必要があること、「こあら」の認知度がまだ低いことである。今後は、インスタグラムなどのSNSを利用した広報活動を行い、認知度を高

めていく予定である。また、2026年から「あずかるこちゃん」という病児保育ネット予約サービスを活用することで、アプリでの申し込みと支払いができるようにして、保護者の負担を軽減したいと考えている。保育学生に期待することは、多くの方に利用してもらえるように、保育現場に立った時に病児・病後児保育についての情報を発信してほしいとのことであった。

②鳥取県立厚生病院 病児保育「きらきら園」

「きらきら園」は、2012年7月に、倉吉市より委託を受けた社会福祉法人敬仁会が鳥取県立厚生病院内に開設した病児保育施設である。「きらきら園」では、子どもの体調の悪い時、仕事の都合上家庭で看病できない場合に、保護者に代わって子どもを預かっており、急な発熱や体調不良の際にも利用できる。「きらきら園」での聞き取り調査では、以下のような話を聴くことができた。定員は4名（最大6名）。1日に2～3名利用されている。2019年から2024年で、累計2,764名が利用している。利用可能な病気は、風邪（急性上気道炎）、溶連菌、アデノウイルス、インフルエンザであるが、コロナウイルス、麻疹、風疹、結核、百日咳、アタマジラミ、熱性けいれん、疥癬、水分が取れない子ども、呼吸が苦しい子どもは利用できない。

看護師と保育士の役割分担としては、看護師は病院への付き添いのほか、しんどそうな子どもや熱の高い子どもを主にみており、保育士は子どもとの遊び、壁面製作などを行っている。保育を行うにあたっては、子どもが安心安全に過ごせるように、様子をしっかり見守ること、休めるような環境を作ること、子どもを笑顔で保護者に返すこと、病気の感染症対策（部屋を分ける）に特に気を配っている。また、登園基準・ガイドラインの理解、子どもの発達段階の理解など、発達を意識した関わりを心がけている。

課題としては、定員がいっぱいで利用したい人が使えないことが多々あり、その改善点が見つからないことである。保育学生に期待することは、この課題に対する改善点を見つけてほしいとのことであった。

4. 成果・課題

（1）病児・病後児保育の課題

①利用促進のための情報提供の工夫

病児・病後児保育の聞き取りを行った際に、存在は知っていても施設がどこにあるのかわからず、利用したくてもなかなか利用できなかった保護者が多いということを知った。鳥取県では、『とっとり県病児・病後児保育ガイド』を作成し、病児・病後児保育施設マップも掲載しているが、利用可能エリアと施設一覧のみで、場所をイメージしにくいものであった。そこで、発表者2名は、保護者がGoogleマップで施設の場所や詳細情報を簡単に閲覧できる「病児・病後児保育マップ」を作成した。保護者が、鳥取県や各市町村のホームページなどでこのようなマップで検索できると、病児・病後児保育の利用促進につながるのではないだろうか。

②保育者による適切かつ具体的な情報提供の必要性

2施設への聞き取り調査の結果、「病児・病後児保育」というサービスが存在することは認識しているが、利用する機会がない、施設や場所を知らない、利用方法を知らない、という可能性もあると推察される。また、仮に利用を希望した場合、利用要件が合致しないことや、利用枠が埋まっているために利用できないケースがあることも考えられる。これらのことから、保育学生である私たち自身が病児・病後児保育への理解を深め、保育現場に出た際に、病児・病後児保育に関する情報を適切に保護者等へ提供することが大切であると強く認識した。

（2）保育学生が病児・病後児保育にかかわる意義

保育実習などを通して、保護者が子どもの病気のために仕事を欠勤したり遅刻しなければならず、職場や周囲の人たちに迷惑をかけてしまう悩みを抱えていたり、子どもが病気の時にも保育園で預かってほしいという要望もあることから、調査データでは現れてこないような病児・病後児保育の隠されたニーズがあると感じる。私たち保育学生が、病児・病後児保育について学び、地域の提供施設を知っておくことで、保育現場に出たときに、必要としている人や保護者に説明したり、紹介することができる。多くの学生仲間を知ってほしいと思う。

今回、聞き取り調査先の方々から、「もっと病児・病後児保育について理解し、知ってもらうための方法を一緒に考えてほしい」と声をかけられた。今後、病児・病後児保育を広めていくために私たちにできることを考え、実践していきたい。